犬猫のレプトスピラ抗体保有状況調査

中尾聡子[1)]、平安名盛己[2)]、新田芳樹[3)]

1）沖縄県家畜衛生試験場、2）あかね動物病院・沖縄県、3）沖縄県家畜改良センター

はじめに

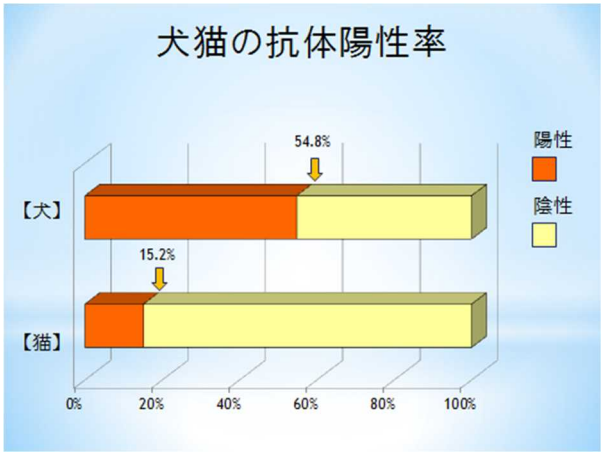
レプトスピラ症は人、家畜、ペットおよび野生動物など多くの動物に疾病を起こす人獣共通感染症であり、公衆衛生上重要な疾病である。人への感染源としては保菌動物であるネズミが重要視されていたが、近年はレジャー活動やペットからの感染が報告されるようになった。今回人との接触の機会の多い犬と猫についてレプトスピラ抗体保有状況を調査したので、その成績を報告する。

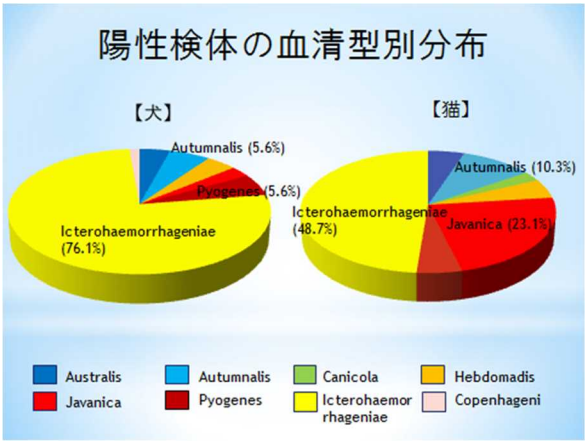
材料および方法

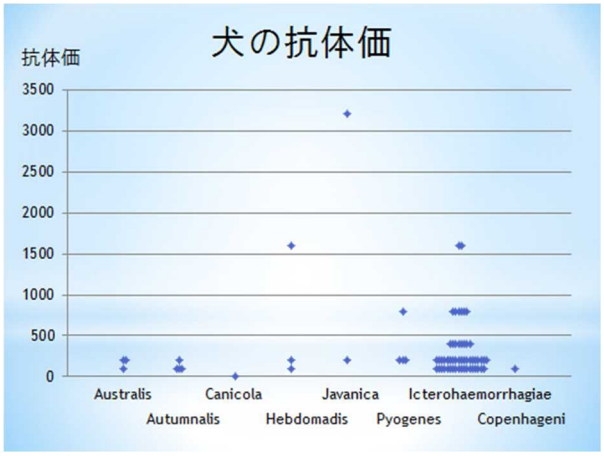
2005 年 4 月から 2006 年 10 月までに動物病院に来院したペットのうち、犬 104 頭と猫 191 頭の血清を用いて MAT（顕微鏡凝集試験）により抗体価を測定した。抗原として *Leptospira* interrogans serovar Australis,Autumnalis,Canicola,Hebdomadis,Pyogenes,Icterohaemorrhagiae,Copenhageni および *L*.borgpetersenii serovar Javanica の計 8 血清型の菌株を使用し、100 倍以上の抗体価を示したものを陽性とした。

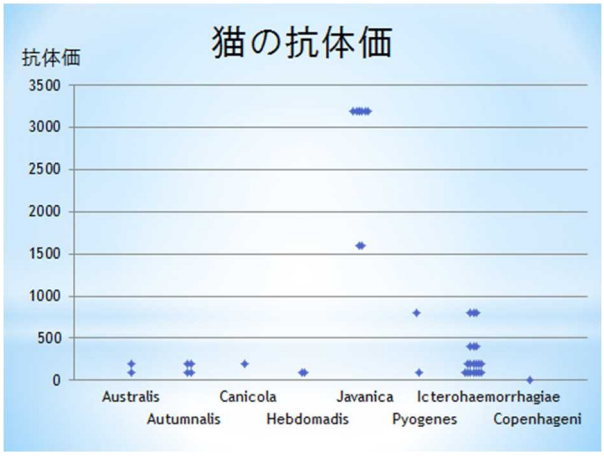
成　績

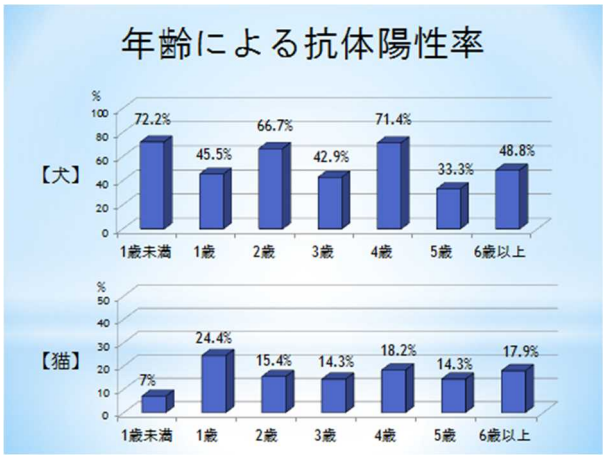
犬の抗体陽性率は 54.8％で、血清型別にみると *L*.Icterohaemorrhageni が最も多く、次いで *L*.Autumnalis と *L*.Pyogenes が多かった。猫の抗体陽性率は 15.2％で、血清型別にみると *L*.Icterohaemorrhageni が最も多く、次いで *L*.Javanica,*L*.Autumnalis の順であった。一部の犬では *L*.Icterohaemorrhageni の抗体価が 1600 倍と高値だった。犬では飼養状況や性別、年齢による陽性率の差はみられなかった。猫では *L*.Javanica 抗体陽性となった個体すべてが 1600 倍以上の高い抗体価を保有していた。また *L*.Javanica 抗体陽性となった猫の飼養状況はすべてが外猫であり、多くが雌猫だった。年齢による陽性率の差は 1 歳未満で低い傾向にあった。臨床症状と比較すると、犬では陽性となった個体の 12.3％に腎不全、発熱、食欲不振、削痩等の何らかの異常がみられたのに対し、猫では抗体陽性となった全ての個体で異常はみられなかった。

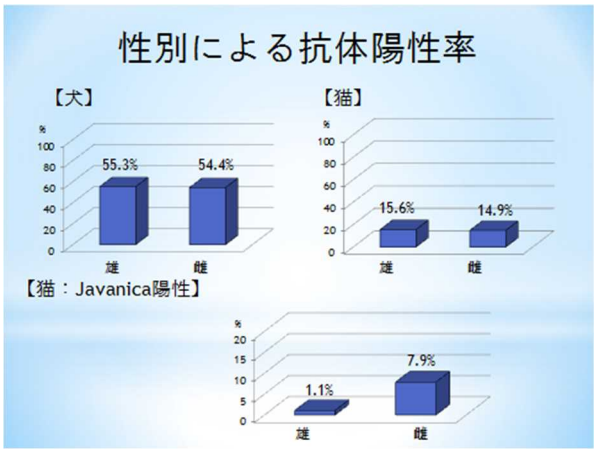


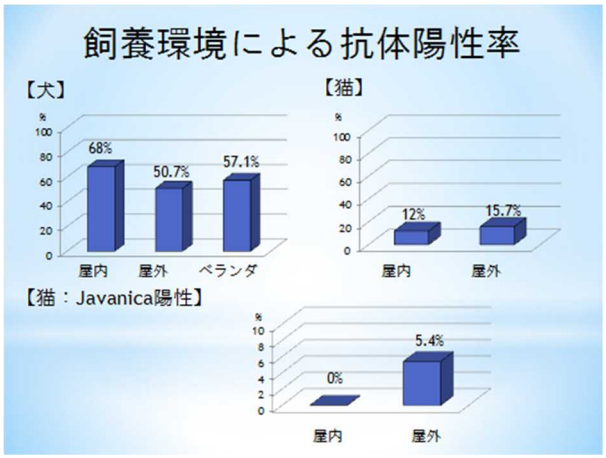


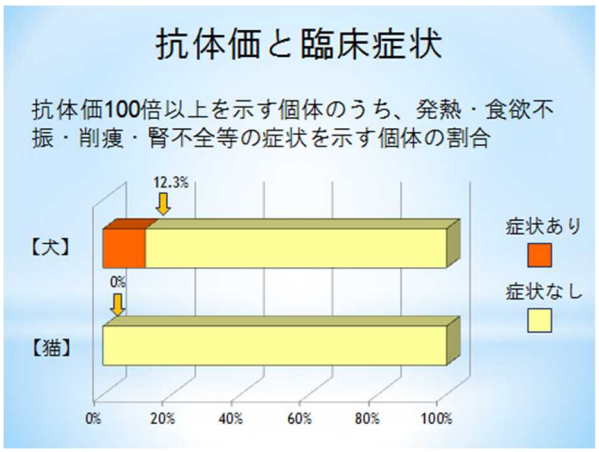












考　察

猫は犬と異なりレプトスピラ症をほとんど発症しないにも関わらず、今回の結果では *L*.Javanica に対して高い抗体価を保有していた。レプトスピラの血清型は宿主特異性があるといわれており、猫については *L*.Javanica に感受性が高いのではないかと思われた。猫はレプトスピラに感染しても発症はしないため、感染を見逃しやすく尿中に排菌している可能性があるため、外猫には注意が必要と考えられた。犬のレプトスピラ症として代表的な *L*.Canicola に対して高い抗体価を保有する個体はなく、*L*.Icterohaemorrhagiae に対する抗体保有率が高かった。犬猫供に *L*.Icterohaemorrhagiae に対する抗体保有率が高かったが、これには地域による差が関与している可能性もあるため県内全域の調査が必要であると考えられた。犬のレプトスピラ症は致死率が高く、陽性個体の一部には何らかの臨床症状がみられているため、ワクチン接種による予防が重要である。犬や猫はペットとして人との接触が濃厚であり、人への重要な感染源として注意が必要であると考えられた。